

## 外来服薬支援を行った患者背景についての考察

(株)ダイチク にいがた調剤薬局 ○平野智弘 井上幹雄 月岡良太 大石美也

### [目的]

本年4月の調剤報酬改定で外来服薬支援料が新設された背景には、医療費が国家財源を圧迫する一方で、ノンコンプライアンスにより廃棄または、各家庭に放置されている残薬が200億円に上るとの試算があり、これを活用すべしとの意図があると言える。つまり、後発品調剤体制加算と同様、医療費抑制策の新たなインセンティブフィーと考えるのが妥当である。一方、本来薬剤師がなすべきコンプライアンス向上を支援するという使命を、さらに果たすことを求められているものもあり、この期待に応えることは、今後の薬剤師職能の評価に影響を与えるものと考えられる。

そこで、今回我々は外来服薬支援に積極的に取り組むために、現状を把握すべく外来服薬支援を行った事例について、患者背景と要因を調査し、服薬指導に還元することを目的に本調査を行ったので報告したい。

### [対象と方法]

平成20年4月1日から6月15日までに、当社全20店舗において外来服薬支援を行った16人18件を対象として、以下の項目を調査した。

①年齢、性別 ②薬局の利用歴 ③処方日数 ④薬剤の種類 ⑤用法 ⑥調剤形態 ⑦服薬支援の必要な要因 ⑧医師への残薬の申し出の有無 ⑨外来服薬支援料算定の有無

### [結果]

対象の背景は平均年齢79.5±4.2歳で男性11人、女性5人であった。薬局の利用歴は本人が14人、家族が1人、本人と家族が1人であった。支援をした平均処方日数は22.6±14.9日で、薬剤の種類は6.9±3.6種であった。全体の用法は1日3回以上が14件(77.8%)、支援を行う前の調剤形態はヒートが11件(61.1%)で、ヒートから一包化への変更率は11件中8件(72.7%)であった。支援の必要な要因で挙げられたのは休薬、飲み忘れが5件ずつ、識別困難が4件、受診日数重複、自己調節できないが2件ずつであった。医師へ残薬を申し出たことのある患者は6人(37.5%)であった。外来服薬支援料は17件(94.4%)で算定できた。

### [考察]

服薬支援を必要とした患者は男性に多い傾向があったことから、特に高齢男性に対して投薬時に残薬の有無とその原因の確認が重要である。服薬支援の必要な要因として識別困難が上位であったことから、来局初期では薬剤の識別が可能でも、日々変化していく患者の状態を詳細で継続的に把握することが重要といえる。約8割の処方内容に1日3回以上の用法があり、服用回数が多い処方内容についても詳細な問診が必要であり、一包化の提案のタイミングを逃さないことも重要である。